



石川 寛介

『採薬使 (さいやくし) 』

江戸時代、方位針は船舶の航海や土木工事に使われていました。それは天然磁石を用いて作られていましたが、天然磁石は当時中国やヨーロッパからの輸入品で高価なものであったと想像します。

1709 (宝永6)年、貝原益軒 (かいばらえっけん) の出版した薬物学の本『大和本草』 (やまとほんぞう) の磁石の項目には「指南針は磁石を用いて針をこすれば、鋭 (とがれる) ところが常に能 (よ) く南を指す。」また、「日本には異邦より磁石多く来る。好否あり」とも書かれています。当時日本では磁石が採れなかったのです。

江戸時代、日本は中国や韓国、オランダなどから種々の物を輸入しました。生糸・絹織物・陶器・砂糖、漢方薬などなど、その代金として莫大な額の金・銀・銅が海外に流出するようになりました。今で言う貿易赤字かな？

そこで8代将軍、徳川吉宗は、財政安定策として国内で自給が可能な体制を整えようと、いくつかの方策を実行し、その一つが採薬使の派遣です。彼らは国内で産出する薬物や有用品の探索と採取を目的として、各地を歩きました。彼らは併せて地元の人々に何が役立つかを教えました。

阿部友之進らは採薬使として奥州南部藩閉伊郡久志村 (岩手県釜石近く) で磁石を発見しました。(1727 (享保12)年) この地域では昔から「慈石がとれる」と伝えられていることを知り、慈石を探し採取しました。「この山 (久志) もっぱら磁石を産す。予親しくこれを目撃するときは、その色黒赤褐にて星点あり。能く鉄を吸い、漢渡 (中国産) のものと異ならず」(松岡『本草一家言』)

伊藤東涯 (いとうとうがい: 京都の儒者) はこれを知り「磁石の日本に産すること前代未聞」とし、その磁石で実験して大いにおどろく。(伊藤東涯『輯軒小録』)

写真は塩釜神社で1996年に尾崎保博さま (現在は京都市在住) から頂いた餅鉄 (もちてつ) です。大きさは45mm x 42mm x 21mm、重さは110グラムです。先般、砂鉄の入った器に落とし砂鉄がひつつき天然磁石であることが判りました。

江戸時代の方位針の画像は、石川県羽咋市ある【羽咋市歴史民俗資料館】のホームページから借用しました。

<http://drivenavi.jp/coverage/no192-0902/index.htm>

参考図書

磁石の魅力 板垣 聖宣 著 仮説社 1991年 第7刷

餅鉄提供 尾崎保博 様

『鉄のふしぎ博物館』開館

来て! 見て! ふれて! ふしぎ体感

鉄を見る目が変わりますよ。
ぜひお越しください。

むらの鍛冶屋®

『夢通信』をご愛読ありがとうございます!!

来る年、2011年がより良き年であることを祈っています。



何でもお気軽にお尋ねください!!